「国語国文学研究」第四十八号　抜刷
平成二十五年二月十二日　発行

菅原道真研究

―『菅家後集』全注釈（二十五）―

焼山廣志

菅原道真研究

――『菅家後集』全注釈（二十五）――

焼山廣志

一

今回は、前稿(1)に引き続いて「486　哭奥州藤使君　九月廿二日、四十韻」の注釈の後半を試みる。前稿でも述べたことだが、この詩は詠作時が直近の「敍意一百韻」に次ぐ長編で八十句からなる作品である。さらに、非情を嘆く心情が、鬼気迫る筆致で貫かれている、太宰府での道真の心情の変遷を知るうえで注視すべき作品と言える。今回は、前稿に続いて全句の注釈を終えた後、この詩の詠作の背景や句内容の考察を試みる。

まず、便宜上、八句毎に段落番号を付け、その後半【六段】から【十段】の四十句を注釈の対象とする。

今回は、近刊の「道真梅の会編『菅家後集』全注釈（二）」の中で本詩全詩の語釈について詳細な考察を試みている。本稿は、その刊行本との重複を避け、必要最小限の語釈にとどめ、詩全体の考察に力点を置く論構成を取った。

二

「486　哭奥州藤使君　九月廿二日　四十韻」（その二）

【六段】

	原文	韻
41	官長有剛腸*	○●●○○
42	不能不切齒	●○●●◉
43	定應明糾察	●○○●●
44	屈彼無廉恥*	●●○○◉
45	盜人憎主人*	●○○●○
46	致死識所以	●●●●◉
47	精靈入冥漠*	○○●○●
48	不由見容止	●○●○◉

【七段】

49 骸骨作灰塵 ○●●○○
50 無處傳音旨 ○●○●○
51 葬來十五旬 ●○●●○
52 程去三千里 ○●○○◉
53 廻環多日月 ○○○●●
54 重複幾山水 ○●●○◉
55 憶昔相別離 ●●○●○
56 寧知獨傷毀 ●○●○◉

【八段】

57 君聞*泉壤入 ○○○●●
58 我劇泥沙委 ●●○○◉
59 天西與地下 ○○●●●
60 隨聞爲哭始 ○○○●◉
61 哭罷想平生 ●●●○○
62 一言遺在耳 ●○○●◉
63 曰吾被陰德 ●○●○●
64 死生將報爾 ●○○●◉

【九段】

65 惟魂而有靈 ○○○●○
66 莫忘舊知己 ●●●○◉

【十段】

67 唯要持本性 ○○○○●
68 終無所傾*倚 ○○●○◉
69 君瞰我凶慝* ○●●○●
70 擊我如神鬼 ●●○○◉
71 君察我無辜 ○●●○○
72 爲我請冥理 ●●●○◉
73 冥理遂無決 ○●●○●
74 自茲長已矣 ●○○●◉
75 言之淚千行 ○○●○○
76 生路今如此 ○●○○◉
77 聞之腸九轉 ○○○●●
78 幽途復*何似 ○○●○◉
79 拙詞四百言 ●○●●○
80 以代使君誄* ●●●○◉

詩形 五言古詩

押韻・韻字

【六段】上声四「紙」韻。齒・恥・以・止。
【七段】上声四「紙」韻。旨・里・水・毀

【八段】上声四「紙」韻。委・始・耳・爾
【九段】上声四「紙」韻。己・倚・鬼・理
【十段】上声四「紙」韻。矣・此・似・誄

校異

【六段】
○有剛腸…剛腸有（尊三）
○恥…耻（刊本）
○致死…頭注「致死作識所」（大島）
○致所…識所（尊一）
○漠…寞（内）（尊二）（尊三）（尊四）
○頭注「漠作寞」（大島）

【七段】無し

【八段】
○閒…閑（内）（静嘉）（松平）（尊一）（尊三）（尊四）

【九段】
○傾…頃（静嘉）
○慝…匿（刊本）（内）（大島）（松平）（尊四）
▼頭注「匿作慝」

【十段】
○復…傍注「後イ」（尊二）
○誄…誄　ミセケチ誄

訓読文

【六段】
41 官長　剛腸有らば
42 歯を切らざること能はず
43 定めて應に糾察を明かにすべし
44 彼の廉恥無きを屈す
45 盗人は主人を憎む
46 死を致して所以を識る
47 精靈冥漠に入りて
48 容止を見るに由あらず

【七段】
49 骸骨　灰塵と作り
50 音旨を傳ふるに處無し
51 葬りてより來のかた十五旬
52 程は去ること三千里
53 廻環す　多くの日月
54 重複す　幾山水ぞ

55 憶ふ昔　相ひ別離せしとき
56 寧ぞ知らむ　獨り傷毀せらるるを。

【八段】

57 君は閒かに泉壤に入り
58 我は劇しく泥沙に委す
59 天の西と地の下と
60 聞くに隨ひて哭の始めと爲す
61 哭すること罷みて平生を想ふに
62 一言遺りて耳に在り
63 曰く　吾　陰德を被りて
64 死生　将に爾に報いんとすと。

【九段】

65 惟れ魂にして靈有らば
66 舊き知己を忘るること莫かれ
67 唯だ要ず本性を持して
68 終に傾倚する所無からしめよ
69 君　我が凶慝を瞰ば
70 我を擊つこと神鬼の如くせよ
71 君　我が辜無きを察せば
72 我が爲に冥理に請へ

【十段】

73 冥理　遂に決すること無くんば
74 茲れより長く已みなん
75 言えば涙千行
76 生路　今此のごとし
77 聞けば腸九轉す
78 幽途復た何似ん
79 拙詞四百言
80 以て使君の誄に代へん

口語訳

【六段】

41 もし上役に物に屈しない度胸があれば
42 (その様子に) 歯ぎしりせずにおられようか。
43 必ずやはっきりと不正を糾弾し
44 あの恥知らずどもを屈伏させるに違いない。
45 ところが、あろうことか、この盗人どもは、悪事の露見を恐れ、君のような不正を糾弾した主人を逆恨みし
46 君を死に到らしめてはじめてそのことの内情が明らかになった。
47 君の霊魂は　暗い黄泉路に入ってしまい
48 もはや立ち居振る舞いを窺う手立てもない。

【七段】

49 君の亡骸はすでに灰塵となっていて
50 言葉をかけて、我が思いを伝えるあてもないのだ。
51 葬られてから百五十日が過ぎ
52 東国と九州と、隔たること三千里。
53 君と別れて以来、あまたの月日がめぐり
54 我ら二人を隔てて重なり合う幾山河。
55 思い起こせば昔、君と別れたとき
56 君が（私より先立って）ひどい目にあって死んでしまうなど、どうして想像できたであろうか。

【六段】

57 君はひっそりと黄泉（よみ）の地に入ってしまい
58 私は目まぐるしく泥土（でいど）に棄（す）てられる身になった。
59 西の空の果てにいる私と地下にいる君と。
60 その君の訃報（ふほう）を聞いたとたん私は声をあげて泣きだしてしまった。
61 泣きやんで昔を回想すると
62 君の、ある言葉が耳朶（じだ）に残っている。
63 君は言った「私はあなたから人知れぬ恩徳を蒙りました。
64 （私の）生命ある限り、いや、死んだ後であってもあなたのご恩には必ず報いたいと思っています」と。

【九段】

65 君の魂に霊が宿るのなら
66 どうかこの昔からの友を忘れないでほしい
67 そして願わくば、私が本性をしっかりと保ち続け
68 ゆらぐこと無く、しっかりと信念を貫けるように私を支えてもらいたい。
69 もし、この私によこしまな振るまいがあると見たならば、
70 鬼神となって私を撃ちくだいてくれ。
71 一方、今の私が無実の罪に陥っていると知ったなら、
72 どうか天の神の許で正当な裁きが行われるよう請うてくれ。

【十段】

73 もし、あの世で、公正なる神の裁きもつきかねるような事態になれば、（君の祈りにも拘わらず神の裁きがないのならば、〈無実が晴れないのならば〉）
74 これで、すべては、永久に闇に（葬られて、埋もれて）しまうだけだ。（もう真実を訴える術が全てが絶たれる）
75 こうして君に（この今の私の気持ちを）告げると、涙がとめどなく流れてくる。
76 今の私の生き様は、このような有様だ。
77 君の訃報を聞いて、私のはらわたは、九転するほどの悲しみに打ちひしがれている。
78 君のあの世への旅路はどうなのだろうか。

79 この拙い詩、四〇〇字でもって、
80 君の惜しまれる死への誄（追悼文）に代えさせてもらいたい。

語釈

【六段】

41 【官長】…官職を主宰するもの。官吏の長たるもの。長官。

『漢語大詞典』には「舊時行政単位的主管官吏。（昔、行政を管轄する官吏）」と説明する。

41 【剛腸】…しっかりした気質。善い度胸。

『『文選』嵇康、與山巨源絶交書」に「剛腸疾惡、輕肆直言、[注] 銑曰、剛腸、謂彊志也。（剛腸疾惡、輕肆直言し、[注] 銑曰く、剛腸とは彊志のことを謂ふなり）」の句が見える。

『漢語大詞典』には「指剛直的氣質。（剛直の気質を指す）」と説明し、[白居易「0003哭孔戡」詩」の「平生剛腸内、／直氣歸其間。（平生剛腸の内、／直氣其の間に歸す）」の例を引く。

42 【切齒】…歯を喰いしばる、転じて激しく憤る。歯がみをする。

【切齒腐心】…切歯し、心を悩ます。怒ること。

[『史記』刺客、荊軻傳] に「樊於期偏袒搤捥而進曰、此臣之日夜切齒腐心也。（注）索隠曰、勇者奪厲、必先以左手扼右捥也。捥、古腕字。切齒、齒相磨切也。爾雅曰、治骨曰切、腐音輔、腐亦爛也、猶今人事不可忍云腐爛然、皆奮怒之意也。〔樊於期　偏袒　搤捥して進みて曰く、此れ臣の日夜切齒腐心するところなり。（注）索隠に曰はく、勇者奮厲すれば、必ず先ず左手を以て右捥を扼すなり。「捥」は、古の「腕」の字なり、「切齒」は、「齒相磨切」するなり。『爾雅』に曰はく、骨を治むを「切」と曰ふ、「腐」の音は「輔」なり。「腐」は亦「爛」なり。猶ほ今の人の人事の忍ぶべからざるを腐爛と云ふがごとし。皆奮怒の意なり〕」の例が見える。

43 【定】…きっと。必ず。（『漢辞海』）

43 【糾察】…罪悪を正し、調べる。糾正。

厳しく取り調べて罪状を明らかにする。

（『漢辞海』）

［『後漢書』皇甫規傳］に「有司依違、莫肯糾察。（有司は依違して、肯へて糾察すること莫し）」の例が見える。

44

【廉恥】…心が清くて悪を恥じる。無欲で恥を知る。

［『荀子』修身］に「偸儒憚事、無廉恥而嗜乎飲食則可謂惡少者矣。（偸儒事を憚り、廉恥無くして飲食を嗜まば、則ち悪少者と謂ふべし。）」の用例が見える。

『漢語大詞典』には「廉潔知恥。（清くいさぎよく恥を知ること）」と説明し［『淮南子』泰族訓］の「民無廉恥、不可治也。非修禮義、廉恥不立。（民に廉恥無ければ、治むべからざるも、禮義を脩むるに非ざれば、廉恥立たず）」の例を挙げる。

45

【盗人】…盗徒。盗みをする人。盗賊

45

【主人】

『漢語大詞典』には「財物或權力的支配者。（財物或いは権力の支配者）」の説明及び、「僕婢及受雇傭者的家主。（召使いや下男たちの雇い主）」の説明がある。

46

【所以】

『漢語大詞典』には「原因。（事件の内情。事の起こり）」と説明する。

47

【精靈】…《仏教語》死者の魂

『漢語大詞典』に「③靈魂（魂。みたま）」と説明し、［李華「詠史」之一］の「身死名不滅／寒風吹墓田／精靈如有在／幽憤滿松煙。（身死すとも名滅せず、／寒風墓田に吹く。／精靈在に有るが如く、／幽憤松煙に満つ）」の例を引く。

『菅家後集』［［479讀開元詔書］にある「哀哉放逐者／蹉蛇喪精靈。（哀しきかな　放逐せらるる者／蹉跎として精靈を喪へり）」の用例は、「生者の魂」として使われている。

47

【冥漠】…暗くて見えない。遠くてはっきりしない。冥土の世界。

『白氏文集』［［0601寒食野望吟詩］に「冥漠黄泉哭不ㇾ聞／蕭蕭暮雨人歸去。（冥漠たる黄泉哭すれども聞へず／蕭蕭たる

暮雨、人歸り去る）」の句が見える。

『漢語大詞典』には「①空無所有。（空であって、有するところがない。世界の事物のすべては因緣によって生じる現象であって実体となるものはないという）」と説明し、［『文選』顔延之「拜陵廟作」］〃の「衣冠終冥漠、陵邑轉蔥青。〃劉良注。冥漠、虛無也。（衣冠終に冥漠たり陵邑轉蔥青たり。劉良注　冥漠は虛無なり。）」の用例を引く。同じく『漢語大詞典』には、「②謂死亡。（死亡のことをいう）」の説明がある。

48【由】…てだて、機会

48【容止】…身のこなし、立ち居振舞。

【七段】

49【骸骨】…肉がおちて骨だけになった屍。

［『後漢書』陳球傳］に「冢墓被發、骸骨暴露。（冢墓は發かれ、骸骨は暴露し）」の例が見える。

『漢語大詞典』には、「屍骨。（死者の骨。白骨）」と説明し、［『呂氏春秋』禁塞］の「故暴骸骨無量數、爲京丘若山陵。（故に骸骨を暴すこと量數無く、京丘を爲くること山陵の若し）」の例を引く。

49【灰塵】…灰と塵と。滅び尽きる喩。

［劉廷琦、「銅雀臺」詩］に「銅臺宮觀委灰塵／魏主園陵漳水濱。（銅臺の宮觀　灰塵に委す、／魏主の園陵　漳水の濱）」の句が見える。

『漢語大詞典』には、「喩消亡。（消滅する喩）」と説明し、［高適「古大梁行」］の「魏王宮觀盡禾黍／信陵賓客隨灰塵。（魏王の宮觀　禾黍に盡き／信陵の賓客灰塵に隨ふ）」の例を引く。

50【無處】

『漢語大詞典』に、「無所處。謂沒有處置的理由。（処理することがない。処置する理由がないことをいう）」と説明する。

50【音旨】…言葉。口に出していう言葉。

『漢語大詞典』では、「言辞旨意。（言葉の意味）」と説明する。

52【去】…隔てる。隔たる。ここでは「隔たる」意。（『漢辞海』）

52【三千里】

［『田氏家集』35和高侍中鎮夷府貢良馬數十疋有敕頒賜偶題長句］に「価高始到三千里／齒少纔經四五霜。（価高くして始めて到る三千里／齒少くして纔かに經たり四五霜）」の句が見える。

53【廻環】…めぐりまわる。

53【日月】…月日、光陰。

『漢語大詞典』には、「時今、時光。（時候・時間）」と説明し、［韓愈「與崔群書」］の「僕自少至今、從事於往還朋友間、一十七年矣、日月不爲不久。（僕、少きより今に至るまで、朋友の間の往還に從事すること、一十七年なり。日月久しからずと爲さず）」の例を引く。

54【重複】…重なる。重ねる。

顔延之、「始安郡還都與張湘州登巴陵城樓作」一首に水「國周地嶮／河山信重復（一本作〝重複〟）（水國は地の嶮なるものを周らし／河山は信に重複す）」の句が見える。

参考【重復】

『漢語大詞典』には「亦作〝重複〟。謂山重水復。（また、〝重複〟とも書く。山が重なり水（川）もまた重なるをいう）」と説明する。

54【山水】…山と水。山河の風景。

『漢語大詞典』には、「泛指有山有水的風景。（泛く山有り水有りの風景）」と説明する。

55【憶昔】…昔日のことを追想する。昔云々であったことを追想する。

［杜甫、「憶昔行」］に「憶昔北尋小有洞／洪河怒濤過輕舸。（憶ふ昔　北のかた小有洞を尋ねしを／洪河の怒濤　軽舸を過ぐ）」の句が見える。

55【別離】…人と別れる。また、別れ。離別。

[『楚辞』「九歌、小司命」] に「悲莫悲兮生別離／樂莫樂兮新相知。（悲しみは生別離より悲しきは莫く／樂しみは新相知より樂しきは莫し）」の句が見える。

『漢語大詞典』には「離別（人と別れる。離別する）」と説明する。

56【寧】…いづくんぞ。いかんぞ。なんぞ。（『漢辞海』）

56【傷毀】

『漢語大詞典』には「損壊（破壊する。破壊させる）」と説明する。

【八段】

57【泉壤】…泉下の地。黄泉。冥途。泉路。轉じて死者。

[潘岳、「寡婦賦」] に「上瞻兮遺象、下臨兮泉壤。（上は遺象を瞻、下は泉壤に臨む）」の句が見える。

58【泥沙】…泥と沙。泥。惜しむに足らない物の喩。

[杜牧「阿房宮賦」] に「秦愛紛奢、人亦念其家、奈何取之盡錙銖、用之如泥沙。（秦、紛奢を愛すれば、人も亦た其の家を念ふ。奈何ぞ之を取ること錙銖を盡くして、之を用ふること泥沙の如し）」の句が見える。

『漢語大詞典』には「比喩卑微的地位。（下賤な地位のたとえ）」と説明し、『白氏文集』[0249「寄『同病者』」] の「或有終老者／沈賤如泥沙。（或いは終老する者有り／沈賤して泥沙のごとし）」の句を引く。

59【地下】…よみぢ。冥途。黄泉。

『漢語大詞典』には「指陰間。（あの世を指す）」と説明し、[『呂氏春秋』「直諫」] の「夫差将死、曰「死者如有知也、吾何面以見子胥於地下。（夫差将に死せんとして曰く「死者如し知る有らば、吾何の面か以て子胥を地下に見ん」と）」の用例を引く。

『白氏文集』にも [3601「哭劉尚書夢得・二首之一」] に「賢豪雖歿精靈在／應共微之地下遊。（賢豪は歿すと雖も精靈有り／應に微之と共に地下に遊ぶべし）」の句が見える。

60【随聞】…聞くに随って

『菅家後集』［485秋夜］に「隨見隨聞皆慘慄／此秋獨作我身秋。（見るに隨ひ聞くに隨ひて　みな慘慄／此の秋は獨り我が身の秋と作りたり）」の句が見える。

61【平生】…普段。平常。かつて。その昔。（『漢語林』）

『漢語大詞典』には「①平素、往常。（ふだん。ひごろ。これまで）」と説明する。

又、「②平素的志趣、情誼、業績等。（日ごろの心ばせや交友の情愛や成果を指す）」との説明もある。

『白氏文集』［0003哭孔戡］に「平生剛腸内／直氣歸其間（平生剛腸内／直氣其の間に歸す）」の句が見える。

『白氏文集』中にも多用されている語である。とりわけ、右の用例は、詩情においてもこの「哭奥州藤使君」と相通じるものがあり、白詩からの濃厚な投影が窺える。近刊の［道真梅の会編『菅家後集』全注釈（二）］の十二句の「弦矢」の語釈の中で須藤修一氏がこの点の詳細な考察をしている。

62【一言】…一言葉。一句。

［『論語』「爲政」］に「子曰、詩三百、一言以蔽之、曰、思無邪。［疏］古者謂一句為一言。（子曰く詩三百、一言以て之を蔽ふ、曰く、思邪無しと［疏］、古は一句を謂ひて一言と爲す）」の用例がある。

『漢語大詞典』には「一句話。一番話。（一句の話。一つの話）」と説明する。

62【在耳】…耳にあること。耳に残っていること。

『白氏文集』［0542早祭二風伯一因懷二李十一舍人一］に「至今想在耳／玉音尚玲玲（今に至るまで想ひは耳に在り、／玉音尚ほ玲玲たり）」の句が見える。

63【陰徳】…己のみ知って、他人に知らさない恩徳。かくれた徳。世間にめだたない善行。

『漢語大詞典』には「暗中做的有德於人的事。（こっそりと人に徳を与えること）」と説明する。

64【死生】…死ぬことと生きること。生死。死活。

［『論語』顔淵］に「子夏曰、商聞之矣、死生有命、富貴在

天。（子夏曰く、商之を聞く、死生命有り、富貴天に在り）」の用例が見える。

『漢語大詞典』には「死亡和生存。（死亡と生存）」と説明する。

『白氏文集』［1037夢三亡友劉太白同遊二彰敬寺一］に「昨夜夢中彰敬寺／死生魂魄暫同遊。（昨夜夢中彰敬寺、／死生の魂魄暫く同に遊ぶ）」の句が見える。

【九段】

65【有靈】…霊が宿る

『紀長谷雄集』［106「紀家怪異實録」に「古老傳曰、此額有靈。（古老傳へて曰はく、此の額　霊有りと）」の句が見える。

参考【霊】…霊妙なもの。不可思議な力をもつもの

（『漢辞海』）

66【知己】…よく自分の心を知ってくれている人。己の真価、真精神を知ってくれる人。

［『説苑』復恩］に「管仲曰、生レ我者父母、知我者鮑子也。士爲知己者死、而況爲之哀乎。（管仲曰く、我を生みし者は父母なり、我を知る者は鮑子なり。士は己を知る者のために死す。而るを況んやこれをなすを哀むをや）」の例が見える。

『漢語大詞典』には、「彼此相知而情誼深切的人。（お互いによく知っていて交情が深く心がこもっている人）」と説明し、［王勃「送杜少府之任蜀州」詩］の「海内存知己／天涯若比鄰。（海内に知己存すれば、天涯も比鄰の若し）」の句を引く。

67【本性】…持ち前の性。本来の性質。生まれつき。天性。

［劉楨「贈從弟」詩］に「豈不罷凝寒／松柏有本性。（豈に凝寒に羅らざらんや、松柏本性有り）」の句が見える。

『漢語大詞典』には、「固有的性質或個性。（生まれつきの気質、もしくは天性が他のものと異なる人物の特性）」と説明する。

68【傾倚】…もたれかかる。たよる。

『漢語大詞典』には「傾斜、歪斜。（斜めに傾く。物事や考え方がある方向に片寄る）」と説明する。

69【凶慝】…道理に背いたこと。「凶忒」に同じ。

参考【凶忒】…道理に違ったこと。また悪。姦悪。凶悪。

『漢語大詞典』には、「猶凶悪。亦指凶悪的人。（凶悪と同じ、または凶悪な人を指す）」と説明する。

70【神鬼】…鬼神に同じ。

参考【鬼神】…神秘的な霊的存在。

「鬼」は「陰の神」、「神」は「陽の神」

（『大字源』）

『漢語大詞典』には、「迷信者所謂心靈和鬼怪。（盲信する人が云うところの心霊と鬼怪（妖怪を指す）の意）」と説明する。

71【無辜】…罪のないこと。また罪のない者。不辜。「辜」は「罪」

『漢語大詞典』に、「①沒有罪。（無罪）」「②無罪的人（無罪の人）」と説明し、［『詩經』小雅、正月］の「民之無辜、并其臣僕。朱熹集注「與此無罪之民、将俱被囚虜而同爲臣僕」。（民の辜無き、并に其れ臣僕とす。朱熹集注に「此れ無罪の民と将に因はれたる虜と俱に同じうせんとし臣僕と為す」）」の句を載せる。

72【冥理】

【冥】月に見えない神仏の作用についていう（『漢辞海』）

【理】法によって訴えを裁く。審判する（『漢辞海』）

【十段】

73【冥理】…天の神の許での正当な裁き。

74【自茲】

【自】より。から（起点を示す）

【茲】ここ。これ。この。㊐此、斯

75【涙千行】…【千行】（ちすじ）の涙。涙がとめどなく流れること。

【行】涙のすじ（『大字源』）

［李賀「有所思」］に「簾外花開二月風／臺前涙滴千行竹。（簾外花開く二月の風／臺前涙滴る千行の竹）の句が見える。

76【生路】…命の助かるべき路。生き逃れざるみち。活路。

『漢語大詞典』では、「活路。亦謂生活的途徑手段、辦法。（生きざま。又は、生活の手段、やり方を言う）」と説明する。

77【腸九轉】…憂え、もだえるあまり、腸が九度も回転すること。非常に心配し、もだえることの形容（『漢信林』）

類似表現として【腸九轉】【九腸】を以下に説明する。

【九回腸】…甚だ憂えて、腸が幾度も回転する。憂悶の甚しいこと。

［『文選』、司馬遷、報「任安少卿書」］に「躍累百世垢彌甚耳。是以腸一日而九廻。（百世を累ぬと雖も、垢は彌甚しからんのみ。是を以て腸は一日にして九廻す）」の用例が見える。

参考【九腸】…「九回腸」と同じ意。憂悶のあまり、何度も腸がねじれること。

78【幽途】…冥途をいう。地獄餓鬼道。

『岩波仏教辞典』には「漢訳仏典では、特に、迷いの暗黒に沈んでいる状態。あるいは、地獄・餓鬼・畜生等の三悪道のような仏の光明が及ばない場所の意で用いられる」の説明がある。

『漢語大詞典』では、「仏教語。幽冥之途。指六道輪回中的地獄、餓鬼、畜生等三悪道。（仏教語。冥土への途。死後生まれ変わる六道輪回のうちの地獄・餓鬼・畜生等の三悪道を指す）」との説明をする。

78【何似】…いかん。述語として用いるときは、いずれも「いかん」と訓読して様子や状態を問う。「どのようであろうか。」「いかがであろうか」などと訳す。（『漢辞海』）

『漢語大詞典』では、「①何。怎樣。（どのようであるか。どのようにするか）」と説明する。

79【拙詞】…拙い詩文。

80【使君】…「国司」の唐名

80【誄】…①死者の生前の功績をたたえ、その死をいたむ。
②しのびごと。死者を哀悼する文章。

井上和歌子氏「『空也誄』考―文体、成立の指示、評価―」の論文中には「誄」その目的についての言及が以下のようにある。

漢文の誄は「――誄并序」。則ち散文の序と韻文の誄の二部で構成される。誄は、四字句で押韻する頌で綴るのが通例であった。（中略）誄について、より詳細な説明は『文心雕龍』等の文体論に見える。（中略）この誄に関する文体論は、以下の五点に纏められる。（中略）⑤記述の方法。伝のスタイルで記述し、頌の文を用い、生前の徳を誉め、そして死を悲しむ。称える事と哀悼する事が両立する記述が必要である。（中略）死者の徳行を伝によって詳述し、更に哀悼の詞を述べ、かつ声に出して朗読される事が誄に求められたのである。」

（「和漢比較文学」一号　三十八頁～三十九頁）

▼ここでは、道真は「五言四十韻」の古詩でもって、井上氏の説明する、本来の「誄」の代用をしたことを意味する。

↓【総括考察】参照

三

【総括考察】

○「哭奥州藤使君」の構成・執筆背景の一考察

▼この詩の執筆背景構成の試論を述べる前に、既に川口久雄氏をはじめとして先学よりこの作品を論じられてきているその一例を以下に引用してみる。

柳澤良一氏は、【余説】の中で「滋実の生前の一言を思い出して、今の私をしっかりと支えてくれと故人の精霊にお願いする。私に姦悪の行いがあるならば私を打ち砕いてもかまわないが、私が無辜の冤罪で苦しんでいるならば、天道の冥利を明らかにしてほしいと。我が身の置かれた窮状を切々と訴えることで、滋実の死を悼むのであるが、そこには、自分にもやがてまもなく滋実と同じ運命が待っているという予感があるかのようであり、滋実の無念の死と、自分とが重なり合わせられている。悲痛な叫びと激しい憤怒に満ちあふれた作品である」と論じる。

（『菅家後集』注解稿〈二十三〉二〇九頁）

（「金沢学院大学紀要」第八〇号）

▼興膳宏氏は、この詩を五段に分け、その最後の段（六十一句～八十句）の考察の中で「最後の一段。滋実がかつて道真にいった一言をきっかけにして、友の霊が死後も自分を見守ってくれるようにと、かき口説くように訴えかける。道真の心中には、自分の生命が遠からず尽きようとしていることへの予感があったのだろう。痛切な魂の慟哭ともいえる叫びが聞こえてくるようだ。悲しみと同時に、ここには激しい怒りがある。滋実や自分を奸計によって陥れた者に対して、道真はやり場のない憤怒の情を燃やしている。これは怒りの文学としても、読む人の心に強く訴えるものがある。後年「北野天神縁起絵巻」などに描かれて広く知られるようになった怒れる道真像の原型となるものを、この詩に見いだすことができるのではないか。」と論じる。

（『古代漢詩選』第八章　菅原道真―その長編古体詩　二五二頁）

▼大岡信氏は著の中で「『奥州なる藤使君を哭す』という詩は、私見では菅原道真の全作品中、肺腑を衝く激痛においても、詩句の論理と影像の鮮烈な展開においても、ずば抜けてすぐれた迫力をもつ、漢詩であればこそ書かれ得た、政治的背景を持つ抒情詩なのです。その理由は、彼が藤原滋実という人の性格、行実、非業の死、いずれの点においても、おどろくほど自分自身との共通性があることに、あらためて思いを致し、そのことに感奮興起してこの詩を書いているからにほかなりません。彼はこの時、まさしく全身的な興奮の中で、インスピレーションの命じるままにこの長い詩を書いたのです。」と言及する。

（『詩人・菅原道真　うつしの美学』Ⅳ古代モダニズムの内と外　一八〇頁）

この作品全体に流れる詩情の考察としては、ここに引用した三氏の論及に尽きると考える。

筆者は以下、この三氏を考察を補強する若干の試論を展開してみる。

㈠ 構成論

この詩の構成を考える時、鍵となる詩句は、八十句「以代使君誄（以て使君の誄に代へむ）」の「誄」にあると考える。「誄」については、既に **語釈** の「80誄」の項で、井上和歌子氏の論考を引用し言及したところだが再度その中で『文心雕龍』で論じられている「誄」の文体論の要約の一文を載せてみる。

「⑤記述の方法。伝のスタイルで記述し、頌の文を用い、生前の徳を誉め、そして死を悲しむ。称える事と哀悼する事が両立する記述が必要である（中略）⑤では誄の伝としての側面とともに哀傷文字としての一面も強調する。又、韻文の誄には殆ど必ずといってよい程、「嗚呼哀哉」という四字の哀悼の定型句が用いられた。（中略）死者の徳行を伝によって詳述し、更

に哀悼の詞を述べ、かつ声に出して朗読される事が誄に求められたのである。」

（『空也誄』考―文体・成立の背景・評価―
「和漢比較文学」一号　三十八～三十九頁）

ここで、この「哭奥州藤使君」の詩に目を移す。今回、試注を施すために便宜上、全体八〇句を八句ずつ十段落に分けてみた。道真自身が七十九・八十句で「拙詞四百言／以て使君の誄に代へむ」と詠んでいることをどう解すべきか。

ここでは、「誄」を死者を追悼する文章「しのびごと」の漢訳語としてではなく、井上氏の言及する古代中国本来の「誄」の文体を指していると考えた方が、道真の学識から考えて自然のように思える。事実、前述の井上氏の「誄」の言及に、この道真の詩を充てて考察すると、うまく、この作品の構成が説明できるように思える。

つまり、

▼［一段・二段・三段・四段・五段・六段］　【徳行】

↓藤原滋実の陸奥の国守としての功績・徳行

▼［七段・八段・九段・十段］　【哀悼】

↓藤原滋実が人々の呪詛により命を落としたその死を悲しむ

「前半」で藤原滋実の生前の徳を誉め、「後半」でその死を悲しむという、井上氏の言及する「称える事と哀悼する事が両立する記述」になっていることが明らかになる。

㈡ 執筆背景―試論

道真が、この詩を古代中国で制作されてきた「誄」の文体を意識し、それに倣った構成にしつつも、「誄」ではなく、「誄」に代わる「五言古詩」のスタイルにしたのか。それは、道真自身が、この「五言古詩」こそが、我が心情を吐露できる最も意を得た作詩スタイルであると考えていたからではないか。井上氏が言及するように、「誄」ならば、「四字句」を押韻する「頌」で綴るのが通例であったこと。又、「嗚呼哀哉」という四字の哀悼の定型句を用いなければならないという制約があるのに比して、古詩にはそうした制約が全くない点、そして何よりも「五言古詩」へのこだわりが道真自身にあったことを物語っていると考える。それは、筆者が、百韻という大作「敍意一百韻」が五言排律であったこと、そして、この大作のあとにこの「哭奥州藤使君」が詠まれたと考えるからである。つまり、「敍意一百韻」と「哭奥州藤使君」は当時の道真の心情を窺える「表裏一体」の大作ではないかと分析しているからである。

筆者は先に「敍意一百韻」に試注を施した拙稿の「作品制作時期考」で次のような一文を公にした。以下再載する。

従来、この詩の制作時期については、川口久雄氏を始めとして多くの先学が一三九句の「九見桂華圓」の句の解釈を「左遷後九ヶ月後の時期」つまり、「十月から十一月」（晩秋から初冬の候）であろうと論じられて来た。

ところが、前述したように、この詩は「季節の推移」を基軸とした詠作内容になっている。そこには、「春」から「初夏」「梅雨」「盛夏」「残暑」「初秋」そして「仲秋」景を詠いつつも、「晩秋」から「初冬」の叙景や心象風景が全く詠まれていないように思えるのである。したがって「左遷後の九ヶ月後」という推定にはどうしても納得がいかない。（中略）

そこで「九見桂華圓」に今年に入って九回目の満月を迎えた（＝今まさに九月仲秋の明月が照り輝いている）との解釈を提起したい」

と述べ、その根拠の一つに、この詩の直後に「485秋夜　九月十五日」（棒線筆者）を置いていることが、既論の「十月から十一月」という詠作時期との整合性からの矛盾点になるのではないかと論じた。

「菅原道真研究―『菅家後集』全注釈（二十一）―」（「国語国文学研究」第四十六号　九十四～九十五頁）

今回、前稿[1]と本稿で「486哭奥州藤使君　九月廿二日　四十韻」に全句にわたって注釈を施した上で考察を施すと、内容上からも、前述の筆者の論を裏付けることが出来るように思う。

その点を、以下「484敍意一百韻」「485秋夜　九月十五日」「486哭奥州藤使君」の三首を並記し、三作品に流れる「詩情」を通して言及してみる。

筆者の論旨を明確にするために、まず大まかな図式化を試みる。

三詩の制作年時

①「484敍意一百韻」
（陰暦九月十五日直前）

←

②「485秋夜　九月十五日」

←

③「486哭奥州藤使君
九月廿二日四十韻」

根拠

139句目「九見桂華圓」
（今年に入って九回目の満月を迎えた）」

題注「九月十五日」

題注「九月廿二日」

	詩句	詩情考
①	199句「敍意千言裏」 200句「何人一可憐」	今の自分の心情を共に分かちあえる「一人」の友も持ち得ぬ「孤独感」。自分の生の軌跡を誰とも共有出来ぬ「絶望感」。
②	8句「此秋獨作我身秋」	自分の無実を晴らしてくれるような心を許し会える友を持ち得ぬ、「天涯孤独の底知れぬ心の闇」の叫び。
③	71句「君察我無辜」 72句「為我請冥理」 73句「冥理遂無決」 74句「自茲長已矣」	亡くなった藤原滋実を通して天の神に自分の無実を世に明らかにしてもらうことを請う。それが、なされなければ、万策尽きるだろうという「絶望感」

このように、三詩を並記して考察すると、①→②→③の流れの中で、道真の当時の心情が手に取るように伝わってくる。

つまり、①「484敍意一百韻」で道真の博識を改めて想起させる、古典籍の故人の事跡に拠りながら、二百句という長大な詩句を通して浮かびあがった詩情は、「自分の今の心情を誰とも分かちあえぬ孤独感」であった。だからこそ、古典籍の故人の行跡をひたすら追うしか術がなかったのである。そこにしか、慰撫するものを見出せない、道真の「絶望感」が詩の根底に流れていることを痛感する詩内容であった。

それが②「485秋夜　九月十五日」の律詩で、「十五夜」より想起する昨年までの自分と、今の謫去の身の落差、そして「無実」の自分を誰一人弁護してくれるものを持ち得ぬ、現状への絶望感が①を受けて、改めて詠われる詩内容となっている。そして今回取り挙げた③「486哭奥州藤使君」へとつながっている。

この詩については、先に、柳澤氏・興膳氏・大岡氏の作品論を引用したが、三氏の論に共通しているのは、「滋実の死を悼むという形を借りて、自分自身を語っていること。そこに策略によって友を死へ追いやった者への憤怒の情が込められている」ことの指摘であると思う。この指摘は、①→②→③と三詩を並べることで、より明らかにされる。

①・②の詩作品で道真が訴えていたのは、「心を許しあえる

友」を持ち得ぬ孤独感であったが、それは、③の詩を読むことで、それが道真の「無実」を晴らしてくれることに力になってくれる、又そうしようとしてくれる現世での人間を持ち得ない絶望感であったことがわかる。藤原滋実が呪詛によって非業の死をとげたことが、道真を大きく刺激した。それは、「現世」ではない、「あの世」の人間だからこそ、真情を吐露する作品に仕上がったのだと思う。そして「あの世」の人間に切望するのは、「天の神」への我が身への公平な采配の仲立ちであった。

そしてそれがならぬ時は、万策尽きてしまうと詠むのは、裏をかえせば、「神はどうして私の無実を晴らしてくれないのか。」「神は本当に存在するのか」という根源の問い掛けに他ならない。

これは、近刊の［道真梅の会篇『菅家後集』全注釈（二）］の十二句「繞身帯弦矢」の「弦矢」の出典考察の中で須藤修一氏が投影の濃厚なものとして指摘する、白居易の諷喩詩「003哭孔戡」全句の詩情、とりわけ、31句・32句「茫茫元化中／誰孰如此權（茫々たる元化の中／誰か此の如き権を執る）」の句内容を強く意識していると考えたい。

このように考察を進めれば、いかに道真が精神的に追いつめられていたのか、そして激情がほとばしるような詩内容になっているのか、自ずと理解できるように思う。

これが筆者の、③「哭奥州藤使君」が①より先にあって、その友の死を契機に、①「敍意一百韻」が道真の「現世」の総括を含むような大作として制作されたという論に賛同出来ぬ最大の事由である。

【注】

（1）拙稿「菅原道真研究―『菅家後集』全注釈（二十四）」（『有明工業高等専門学校紀要』第四十八号）

〈追記〉（一）

台湾元智工学院の中国古典詩詞曲文研究のためのサイトである「網路展書讀（BIG5）」（http//ds.admin.yzu.edu.tw/）の『全唐詩』の項、及び北京大学中文系の唐代以前の詩歌の総合データベースである「全唐詩全文検索系統（UTF-8）」（http//chinese.pku.cn/cgi-bin/tanglibrary.exe）を詩語検索の為に大いに利用した。

〈追記〉（二）

平成十八年四月より、現在に至るまで「大牟田市民大学講座」（市民大学ゼミ、道真梅の会の会員）須藤修一氏・田中陽子氏、井原和世氏、荒川美枝子氏の四名と定期的に「菅家後集」の漢詩講読会を催してきている。この会で討議・検討したもので、本稿では【六段】を井原和世氏の、【七段】は須藤修一氏の原稿を【八段】は荒川美枝子氏の原稿を【九段】は須藤修一氏の原稿を【十段】は田中陽子氏の原稿を基に、その内容に再考察を試み、加筆の上、稿をしたため直したものである。

（やきやま　ひろし／
大学院文学研究科第七回修了／有明高専）